
魔法少女まどか マギカ Another Paradox ~巴マミ編~

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ Another Paradox
巴マミ編

【Nコード】

N7862S

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

1人の少女がいた。

少女は、かけがえの無いもう1人の少女を救おうと、何度も同じ時間を繰り返し続けた。

この物語は、その繰り返し返された時間の中に、実際に？あったかもしれない？、そんな時間の1つを描いた物語である。

(前書き)

試験短編第1弾、マミさん編です。

では、お楽しみいただければ幸いです。

「遊びに行こう」

「ど、どうしたの？ そんな藪から棒に……………」

とある日の昼下がりに、とあるマンションの一室の玄関先で、出迎えた少年がそう何か決意したような表情で唐突に言うのを、その部屋の住人である少女　　巴　　マミは、啞然としかけた舌をようやくと動かして、そう返事を返す。

彼の名は暁　優斗。彼女、巴　マミとはクラスメイトであり、？とある事情？により互いをよく知る関係である。

「だから、どこか遊びに行こう。それとも、何か用事でもあるの？」

「い、いいえ。特にないけど……………その……………どうしてそんな、いきなり？」

今日は魔女の探索をするくらいしか予定という予定はなかったから、一日空くには空いているし、少年の誘いも煩わしくなどない。

むしろ、誘ってくれて嬉しいとすら思っている。

が、やはり気になるものは気になるのだ。

「べ、別に何だっでもいいじゃん、そんなの。それより行くの、行かないの？」

「……………ふふっ。じゃ、一緒に一緒させてもらおうかな。準備するから、

ちょっと待っててね」

頬を染めてそっぽを向く少年の様子に、やや呆然としていたマミは可笑しくて、くすりと笑うと部屋の奥へ消えていく。

「たく……………」

ぱたん、と静かにドアの閉まった玄関先に、頬を膨らませた少年の声が木霊した。

魔法少女まどか マギカ 二次創作特別短編

第0話 もう、1人なんかじゃない

彼は、いつの間にかマミの傍にいた。

いつの間にか傍にいて、いつの間にか、彼がいるのが当たり前になっていた。

そうして、そんな彼にいつしか惹かれて。彼がいることが、既に自分という存在の一部となっているようにすら思える。

だから、

「で、やってきました遊園地っ！」

と、楽しそうに両腕を上へ突き出してはしゃいでいる彼を見ると、休日が一日潰れたとしても、なんだかそれでもいいかな、という気になってしまふマミなのだった。

先程唐突に彼が訊ねてきて、数時間後。

準備を終えたマミを伴って優斗がやってきたのは、割と大きな遊園地だった。

「へえ……………こんなところに遊園地なんかあったのね」

「へへっ、知らなかったでしょー！」

どうだ、と言わんばかりに胸を反る優斗に、また1度マミはくすりと笑うと、辺りを見回す。

見た目に違わず、中もそれなりに広い。

これなら、アトラクションの数にも期待が持てるだろう。

「じゃあ、早速行きましょう」

「あ、ちょ、ちよつと巴さんっ!？」

強引にも手を握り、優斗を引っ張るようにしてマミは遊園地の中へ踏み込んでいく。

最初こそ素っ頓狂な声を上げていた優斗も、やがてその手を握り返した。

その時の彼の顔は、恥ずかしげながらも嬉しそうに綻んでいた。

「っ、疲れた……………」

その、更に数時間後。既に陽は橙にその色を変え、時刻が夕刻に差し掛かりつつあることを示していた。

既に客は殆どいなくなって、辺りには人影もまばらである。

そのような時刻まで、ジェットコースターをはじめとするアトラクションを幾つも楽しんだ2人は今、ベンチで休憩を取っていた。

予想通りこの遊園地のアトラクションのバリエーションは多く、それ故2人共なかなか楽しむことが出来た
はずなのだが。

「だ、大丈夫……………?」

ベンチ1つを丸々占領して横になる優斗の頭を撫でながら、マミが心配そうに訊ねてくる。

同い年なのだし、まるで年下のように撫でられているこの状況は優斗自身にとってみれば無性に恥ずかしいのだが、それを振り払う気力もない。

改めて、自分の絶叫系の苦手加減をその身をもって再認識してしまった格好である。

「もう。苦手なら苦手って言うてくれればよかったのに……………」

「だ、だって……………」

悔しげに言い返そうとする優斗だったが、次の言葉が出てこない。

否 口までは出掛かっているのだ。

ただ、彼のプライドと羞恥心が、それが飛び出てくるのを著しく妨げているだけで。

「だって何ももないでしょう?……………ちょっと待っててね。何か飲み物買ってくるから」

「あ……………」

待って、と言う前に、マミは自分の鞆を手に自販機へと駆けていく。

その後姿を見送って、優斗はベンチに寝そべったまま天を仰いだ。

「……………これじゃ全く、逆じゃないか……………」

優しくされて嬉しい一方で悔しげな表情を浮かべ、その相反する感情に困惑し、優斗は頭を抱える。

今日こそは自分が、彼女のことを楽しませてあげなければ。

そう思うのだが　　否、思えば思うほど空回りして、結局彼女のお世話になってしまう。

マミ自身は世話好きでもあるため特に気にはしていないのだが、それは彼のよしとするところではなかった。

なんだか　　男として、いろいろと情けない気持ち沸々と湧いて来るから。

そんな風に、少年が自己嫌悪に陥っていると。

「……………っ!?!?」

突如、彼を包む世界が一変した。

そこには先程のような暖かな夕日の輝きはない。

ただ、まるで絵画の1ページを切り出してきたかのような異空間が、広がっていた。

「魔女……………否、使い魔っ!?!?」

肌身離さず身に付けている指輪が、宝玉？ソウルジェム？に姿を変
える。

それを用い、少年は文字通り

？変身？した。

先程までのような少年らしい上下は何処かへと消え失せ、代わりに
身に纏うのは、まるでドレスのような女性モノのカラフルな衣装。

そして、変化したのは服だけではない。

先程まで平坦だった胸部には、僅かな膨らみが見て取れた。

「うう……………衣装には慣れても、これには絶対慣れそうにないなあ
……………」

羞恥に頬を染めた少年 否、少女は、何やら奇声を上げて
音符のような歪な形をしたものを投げつけてくる人形を見据え、拳
を振りかぶった。

「でやあああああああつっ！」

一撃必倒。

まさしくその言葉が相応しい、グローブを嵌めた右拳の渾身の一撃
が炸裂し、音符は跳ね返され、それを投げつけた張本人である狂気
の人形を貫いて消滅した。

「巴さんっ……………！！」

駆けていった守るべき人の名を呟くと、少女は跳んだ。

「はあ、はあ……………」

一方、彼から離れたマミもまた、その異空間、結界の中にいた。

既に変身は済ませ、手品のように次々に出現する銃から光弾を発射する。

それに、優斗の側にも現れた人形達が次々と貫かれて爆散していった。

撃つても撃つても、減らぬ使い魔。

このような時、中心的役割を担っている敵を撃てば、即座に結界はなくなり、敵も消滅する。

確か前にも、このようなパターンを相手にしていた時があった。

大丈夫だ やれる。

優斗がいらないおかげで前衛で守ってくれる存在がない分、自分から積極的に前へ出て撃たなければならないが、それでも今は1人でやるしかない。

いつかは、あの心優しい少年なら助けに来てくれるはず。そう信じているから。

しかし。

「一体、どれが……………」

その、中心的役割を担う敵というのが、なかなか見分けることが出来ない。

そればかりか量は更に増え、まるで人海戦術でマミを飲み込もうとしているかのようだった。

そして。

見分けのつけられない焦りと、数の不利を突かれたある時
少しの隙が生まれてしまう。

銃の配置の死角から、マミを狙う人形が
1体。

「あつ……………」

気付いた時には、既に遅し。

音符の形をした爆弾が、マミの全身を焼き尽くして吹き飛ばさんと、無情にも打ち出される。

死を覚悟したマミの思考が
瞬間、停止した。

だが、世界の運命とはとても人1人の予想どおりにいくものではな

しかし彼の命の炎が今にも掻き消えそうなことに変わりはなく、故にマミの胸の内に巢食うざわつきは消えてくれない。ふとはっとして眼下を見れば、それを表すかのように彼の胸元のソウルジェムが少しずつ罅割れていった。

「巴、さん……………よかった、無事で……………」

「しっかりしなさい！ 死んだら……………死んだら私はどうなるの！？ 私を1人にしたくないって言ってくれた、あの言葉は嘘だったの！！？」

いつも1人で戦っていたマミを、救ったのは優斗だった。

戦いを見かけたのは、本当に偶然。

しかしマミには、それがまさに運命のように感じられて

戦いの中にいながら、それを支えてくれる彼の存在に感謝していたのだ。

しかし今、彼女にとってかけがえのない存在にまでなっていた彼の命が消えかかっている現実に、マミはもう、どうにかなりそうないだった。

「大、丈夫」

弱々しく微笑んで、優斗はマミの頬に触れた。

流れる涙が傷口に触れ、僅かに優斗の表情が歪む。

「巴さん、は……………もう、1人じゃ……………ないじゃない。だから、もう……………僕がいなくなつて……………」

「そんなことない!」

もう聞きたくない。

その一心で、ママは優斗の途切れ途切れの言葉を遮り、彼の身体をきつく抱きしめる。

「私は……………まだ1人なの! 貴方がいなかったら、私はつ……………!」

「大丈夫。大丈夫、だから……………」

抱きしめるママの背を、焼け焦げた手で優しく撫でる。

もう、何も怖いものなんてない。そう言い聞かせるように。

「君は、もう……………」

1人なんかじゃ、ない。

そう、最高の笑顔とともに紡がれた言葉を最後に

「あ……………」

まだか細い少年の手は、ママの頬からゆっくりと
ちていった。

滑り落

同時に、ひび割れに耐え切れなくなった彼のソウルジェムが、粉々に砕け散って消滅する。

「ま、ママさんっ……………!?!」

涙ながらの狂気の笑みに恐怖すら覚えた2人は、思わず後ずさる。

そして。

ドキュンッ……………。

「え……………?」

反応する余裕すら、なかった。

銃声は1つ。果たしてそれは、何を狙ったものだったのか。

「さやか、ちゃん……………!」

自分の隣で、ソウルジェムを撃ち抜かれて崩れ落ちる友人の姿を見て、まどかが声を上げる。

力の核であるそれを失ったさやかは、断末魔を上げる間もなく絶命した。

「つぶつぶ……………もう、何もかもどうでもいい……………」

ゆらり、と力なく立ち上がったママの顔に浮かぶは、彼女が狂って

しまった証である狂気。

正常を見失った今の彼女に、できることは。

「私、は」

狂うこと、だけ。

泣きながら笑う、その錯誤的な表情で向ける銃の先にいるのは

先輩で、仲間でいようとした少女の姿だった。

一方のまどかは、恐怖に足が纏れてしまい、逃げることが叶わない。

「皆で……あの世へ行きましょう？　ねえ……」

そう言って、銃のトリガーが引き絞られ。

ドキョーンッ。

「……………あ、あっ……………」

呻き声の後、どさり、と何かが倒れる音。

鹿目 まどかは　　まだ、立っていた。

変身の解けた少年に、覆いかぶさるようにして倒れたマミは、絶望

の表情を残したまま、その命を散らせた。

「……………大丈夫？」

何が起こったのか理解できず、呆然と突っ立ったままのまどかに、新たに地に降り立った少女が1人、声をかけた。

長い黒髪を揺らし、無表情の中に気遣いを滲ませた少女の名は、
美 ほむら。

おそらくはそれでマミのソウルジェムを撃ちぬいたのであろう1つの拳銃を手にほむらは、話しかけられたにも関わらず呆然としたまま動かないまどかの下へ歩み寄る。

「どうして……………」

それにも反応することなく、まどかは膝を折った。

彼女の問いに、答える者はなく
ただ、風が煩わしく吹き去るのみ。

「どうして、なの……………皆、さっきまで笑ってた、はずなのに……………
どうしてっ……………」

くぐもった問いに嗚咽が混じり、アスファルトの地面を涙が静かに濡らしていく。

「う、あああああああああ……あああああああああ
あ……」

「……………やあ、見てくれたんだね」

「そうさ。これも1つの可能性。曉美 ほむらによってリセットされた時間軸の中で、現実に？ありえたかもしれない結末？さ」

「この世には、こんなふうに、数々の？あつたかもしれない？現実が重なり合うようにして存在している。君達人間の言葉を借りるなら、パラレルワールド、とでも言えばいいのかな？」

「君も、僕も。その無数の数だけ無数に存在する、1つの存在に過ぎないんだよ」

「さて。僕は今、君に1つの可能性を示した」

「この……………君達人間の面倒な感情の紡ぐ世界をどうするのか。決めるのは、君次第なんだよ」

(後書き)

どうも皆様。

お久しぶりの方、お久しぶりです。

初めましての方は初めまして。神崎はやたと申します。

さて、神崎作品史上初となるまどマギ作品。いかがでしたでしょうか。

個人的にはもっともっといろいろ出来たような気がしてならないのですが、超試験的な作品ですので、あまりくどくない今の形でよかったですようにも思えます。

ただ、「神崎はやてがまどマギを書くところなりますよ」という、雰囲気だけでも掴んでいただければ。

無論、実際に連載を書くとするならばストーリーは全く違うものになりますから、まどマギ本編の絶望加減を織り交ぜつつ、落ちるところに落ちるようなものに仕上げられたらと思っておりますが。

ていうか、最後の終わり方がまんま仮面ライダー龍騎のTVスペシャルのようになってしまった……。

まどマギ特有のシリアス感や救いよしの無さを表現しようとして入れたみたのですが……それで上手くいったのかはかなり怪しいところです。

この短編で、マミさんの紙メンタル具合が強調されてしまった気が

しますw

展開も、どことなくほむらちゃんの間時間遡行の中にあつたものに似ていますしね。

ですが、忘れてはならないのがこの話が、？あつたかもしれない時間軸？にあるということ。

あつたかもしれないのだから、そこまで本筋と違いすぎる展開にならないというだけなのです。

違うのは、マミさんの絶望の対象と、マミさんが撃つた人くらいのものです。

さて。今回の短編の主人公となつた暁 優斗。実は彼、1人ではありません。

ラストで、謎の人物（まあ、バレバレでしょうけど）が語りかけていたのも優斗であり、また今回の本編を生きたのもまた優斗である。

世界には、無数に彼であつて彼ではないものが存在しているのです。

故に劇中では、彼の容姿や詳しい出自などに関する描写を一切していません。

まあ、試験短編であり、ここでいろいろと出してしまつといずれ書くであろう本編に差し支えるといった懸念も含んだことなのですが。

とはいえ、これでマミさん編は終了です。ここまでお読みくださいまして、ありがとうございました。

では、次回、佐倉 杏子編にてお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862s/>

魔法少女まどか マギカ Another Paradox ~巴マミ編~

2011年10月6日14時19分発行